

子どもと女性の
健康相談室

69



福島医大ふくしま子ども・女性医療支援センター特任教授
神保 正利氏

子宮頸(けい)がんは子宮の入り口にできるが、近年三十〜四十歳の女性の性が増えています。幼い子どもを残して命を落とすケースも多いことから「マザーキラー」とも呼ばれています。

マザーキラーを防ぐ

厚生労働省からの積極的な接種の呼び掛けを中止してまいりました。その後専門家による検討部会で、接種後に生じた症状とワクチンとの関連が明確で

ないことが示され、国内外での大規模調査でワクチンによる子宮頸がん発症予防に高い効果が見られたことから、今年十一月に積極的な接種の呼び掛け再開が決定しました。

接種を希望される場合

主な原因はヒトパピローマウイルス(HPV)の感染で、HPVを保有するパートナーとの性交渉によって女性は一生涯に一度は感染するといわれています。HPVに感染しても多くは免疫力で排除されますが、約10%の人は排除されずに子宮頸部に感染が持続し、一部の人が長い期間を経て子宮頸がんに進行します。HPVの感染を防ぐために開発されたのがHPVワクチンです。

現在国内で接種可能な三種類のワクチンは全てHPV16型と18型の感染を予防できます。公費(無料)で接種可能なワクチンは二種類で、小学六年生から高校一年生の女子が対象です。ワクチンの詳細は「表の通りです。HPVワクチンは二〇一三年四月に定期接種開始となりましたが副反応の訴えが相次いだために

子宮頸がんワクチン

ワクチン名	国内発売時期	接種種別回数(対象)	予防するHPVの種類	費用
サーバリックス	2009年12月	定期接種3回 (小6~高1女子)	2種類	公費負担 (対象時期以外は1万5000円~2万円/回×3回)
ガーダシル	2011年8月	定期接種3回 (小6~高1女子)	4種類	公費負担 (対象時期以外は1万5000円~2万円/回×3回)
シルガード9	2021年2月	任意接種3回	9種類	自費 (3回で約10万円)

は、HPVワクチンの有効性とリスクを理解した上で、公費接種対象期間に受けることをお勧めします。公費接種対象期間を過ぎても、ワクチンにより子宮頸がん発症の高い予防効果が期待できますので、接種を検討してみてください。

ただしワクチンを接種しても子宮頸がんの発症を完全に予防できないので、接種された方も二十歳を過ぎたら定期的に子宮がん検診を受けることをお勧めします。

次回回は来年1月17日掲載